

遠似値への接近

——右と左の象徴的分類に関するニーダム
の所論をめぐって

長島 信弘

1

亀井先生の本学最後の年であった一九七五年度に、私は先生と「言語と社会」という名の部門外特別講義を担当するという榮譽ある窮地に陥った。何とか言語と社会を結びつけるために私が講義に用いたのが

Needham, Rodney ed., *Right and Left: Essays on Dual Symbolic Classification*, The University of Chicago Press, 1973

(75) 研究ノート
である。本書は、右と左の対立を基とした象徴的二元分類に関する論集で、エヴァンズリブリチャードの緒言、編者ニーダムによる序論、問題の出発点となったエルツの「右手の優越性」という論文と、十七の個別民族誌的研究から成っている。このノートは、ニーダムが序論で述べている方法論上ならびに認識論上の諸問題を中心に、右と左の研究史を概観し、併せて若干の私見を述べることを目的としている。

2

「我々の両手ほど完全に似ているものがあるだろうか。しかも両者の間には驚くべき不平等が存在している。右手には名譽と、心をくすぐるような呼称と、特権が与えられている——右手は行動し、命令し、『取る』。反対に、左手は侮蔑され、賤しい補助的役割しか与えられていない。左手は単独では何もできず、手助けをし、支え、『持つ』だけである。右手はあらゆる貴族性の象徴でありモデルであるのに、左手はあらゆる賤民性の象徴でありモデルである。」(Hertz, 1973, 3)

こういう書き出しで、エルツはヨーロッパばかりでなく、マオリ族をはじめ世界の諸民族において、右手に道徳的優越性が与えられていることの基盤が、人間の生理的自然におけるささやかな非対称性(右手の器用さ)にあるのではなく、人間の思考における根元的な二元論的傾向が右手を利き腕として優越させ、左手の活動を抑制させているのだと結論する。そして、集合意識としてのこの右と左の対照的価値が、印欧諸語において、言語現象の中に見出せることを指摘する。第一に、「右」を指す語は同型のものが各言語を通じて広く分布し、安定しているのに対し、「左」を指す語は変異が大きく、しかも同一言語においても頻繁に置きかえられてきたという事実がある。第二に、「右」は力、器用さ(dexterite: 「右」) 知的率直さ、良い判断、高潔さと道徳的な廉直さ、好運と美、法的規範などの観念を表現し、「左」はそれらと正反対(たとえば sinistre)の観

念を表わしている。

このようにエルツの研究は「左手の不浄性」の研究、人間性の暗黒面解明の一つのステップともいえるものだが、彼が同時に強調したのは象徴的分類の根底にある「両極性」あるいは対立の問題だった。しかし、エルツの論文はほとんど無視され、このテーマを取り上げた民族誌的研究はごく散発的なものだった(Needham, 1973 a, xiii)。この問題に人類学者の関心を再び向ける転機となったのは、ヌア人の槍の象徴性に関するエヴァンズリブリチャードの論文だった。(Needham, *ibid.*)

3

エヴァンズリブリチャードは、エルツに大きな影響を受けたことを記しながら「ヌアの地にいたとき、私は右と左がヌア人にもっている重要性を半ばしか意識していなかった」(Evans-Pritchard, 1973, 95-96) ために、「この論文を書くにあたってフィールドノートを見ても、右と左に関してあいまいな部分がいくつかあることを認めている。これは、分析概念が実地調査における「発見」価値をもつことの良い例証といえよう。ヌア人にとって、槍は右手の延長であり、力と男性原理、父方親族、善と生命力を表わし男性は左手の使用を極度に抑制される。左側は弱さと女性原理、母方親族、邪悪さ、死などの観念と結びついている。しかしヌア人は左手それ自体を物として邪悪なものともみなしているわけではない。左利きの人間は別に差別されず「彼の左手は右手である」ということで処理されているし、

儀礼の場で犠牲に供された家畜の左半分は、参加者以外の者に与えられるのである。このように、左と邪悪さの結びつきは、左手の肉体的劣性からひき出されたものではなく、象徴的なものであるとエヴァンズリブリチャードは結論して、エルツの見解を支援している。(Evans-Pritchard, 1973, 97)

エヴァンズリブリチャードはこの論文ばかりではなく、オクスフォード大学の講義で毎年エルツの論文を講じて右と左の問題に対する関心を喚起してきたが、一九六〇年に彼の序文を付したエルツ論文の英訳がニーダム夫妻によって刊行された同じ年に、ニーダムがケニアのメル社会におけるムグウェとよばれる聖職者の左手の優越性に関する論文を発表したことによって、多くの社会人類学者たちがそれぞれのフィールドでこの問題の実証的研究を試みるに至った。とくにニーダムが用いた諸対立を二つの欄に分けて表示するスタイルは、他の研究者たちがこぞって採用し、このため後に述べるような誤解を生むことになった。左の表はメル象徴的二元分類をニーダムが図式化

右	左
北	南
白	黒
昼	夜
妻	共妻
第一	年少者
年	女性
長	子
者	位
男	劣
性	西
優	日
位	没
東	闇
出	光
の	老
光	治
老	権
*長	威
政	黒人
治	白人
権	農耕
力	採集
	蜂蜜

(Needham, R. 1960)

*注目すべき特性

ニョロの象徴的分類図式

左	右
王妃	王
女性	男性
臣下	首長
凶兆	吉兆
病氣	健康
貧困	富
地	天
黒色	白色
危険	安全
死	生
悪	善
不浄	浄
奇数	偶数
*呪占師	*王女
*神秘的職能	*政治的役職
狩猟	牛
裸	着衣
他言語	ニョロ語
野蛮	文明
太陽	月
自然	文化
異常なもの	分類されたもの
無秩序	秩序

(Needham, R. 1967, 447)

*注目すべき特性

論文によってニーダムの方法を明白に批判したのはピーティ

4

したものである。
 ニーダムは自身でメル社会を調査したのではなく、ベルナル
 ディの調査報告(1)に基づいて分析し、ムグウェの左手が
 通常の長老たちの右手よりも優越性を与えられているのは、政
 治権力(右)に対する宗教的権威(左)という対立の脈絡の中で理解で
 きると説明したのである。すでに述べた如く、この分析の影響
 は、とくにオクスフォード系の社会人類学者たちの間に、一九
 六〇年代において大きなものがあった。しかし、この種の研究
 が次々と発表されるにつれて、その方法と目的に対する疑惑と
 批判が聞こえはじめたが、反論の根拠はしばしば不分明であり、
 その形式も「孤立的なあてこすり」以上のものは乏しかった。
 (Needham, 1973, xviii)

人に押しつけているのだと考えられなくもない」(ibid.)

①「この種の研究において説かれている分類は、研究対象にな
 っている人々の心の中に存在しているのだろうか。もしそう
 だとすれば、その明白さのレベルはどこにあるのだろうか。
 それとも、観察者の心の中にしか存在しないのだろうか。」
 (Beattie, 1968, 415)「彼は自分が発展させた図式をニョロ

(一九六八)だが、その背景は、ピーティが積年研究してきた
 ウガンダのニョロ王国について、ニーダムが文献によってその
 象徴体系を分析してみせたことに端を発するという変則的なも
 のだった。(2)この論争は、民族誌的記述の解釈や文献操作の細部
 にわたる部分が多く、公平な要約をすることは紙数の関係上不
 可能だが、ニーダムはピーティの批判を次の四点に要約し、反
 論を加えているので、まずニーダムの提示したニョロの二元
 象徴対立の主要部分を紹介してから、論点をまとめてみよう。
 ピーティによるニーダム批判

②「この表で示唆されるほどの規
 模で、ニョロ人の象徴的思考に
 二元論的性格を負わせることは、
 ニョロ民族誌からは保証されな
 くない」(ibid., 439)

③「二項対立の予め作られた図式
 は、ニョロ人の思考のある様相
 には妥当するかもしれないが
 (あらゆる思考のある様相には

疑いもなく妥当するように、それらを解放する扉を開けるためのマスターキーではなす。(ibid., 439)

④「ニロ人が呪占師たちを……不吉なものとみなしている証拠はない。……奇数が不吉であると考えられている証拠はない。……吉か不吉かは多くの場合事物や事件のある様相であり、局面であって、どちらかにきちんと分類できるような絶対的な性質をもたなす」(ibid., 411-5)

ニードムはこの順に反論と説明を加えているが、重複する点もあるので、次のように整理してみる。

(1) 脈絡と様相

表にあげた対立項は、どれも特定の脈絡において、具体的に明示されていると見なしうるものを取り上げている。したがって、予め作り上げた図式を押しつけたわけでもなければ(ビートの批判④に対する答)、どんな状況においても常に成立している絶対的な対立でもない。(④の後半部分への答)まさに事物や情況の外的様相なのである。

(2) 類比と属性

タテに並べられた諸項目間の関係は、類比による結びつきに過ぎず、共通の属性を有する排他的な範疇を成すものではない。左と不吉さが結びつくということは、左の列にあるすべての項目がそれ故「不吉」であるということではなす(④の前半に対する答)。直接の類似や同質性ではなく、間接的「弁証法的類比」(デューメジルの表現)による多重的な連関こそが象徴的

分類の一つの特性である。したがって、「呪占師がある点で女性とみなされる」という極めて疑わしい仮説(Beattie)を考える必要はない。呪占師は左手を通じて「ニロの呪占師は左手で子安貝を投げて占う」象徴的に女性と結びつけられるのだが、それは男性と右、女性と左という連合から類比としてひき出されたものである。同様に、呪占師が「黒」とか「奇数」であるというわけではなす。(Noedham, 1973, xxx)

(3) 全体と部分——規模と一般性

ある社会に集合表象として存在すると考えられる二元的諸対立を識別し、その相互連関を便宜的に二つの列から成る対照表として示すことは、その社会の人々の思考と心象の全体を図式化したと主張することではないし、識別された諸対立が、その社会で一般的であり、広く普及、浸透しているというわけでもない。象徴的分類には二分法ばかりでなく、三分、四分、五分といった多元様式があり、一元的思考もある。それらは互いに共存し、混在しうるものである。二元対立の原理が社会生活においてどの程度の重さをもっているかは社会によって異なる。南インドのように、「右と左のシンボルリズムが社会の根幹を成す」ともあれば、ウガンダのルグバラ社会の如く、比較的重要ではないこともある。それは実証分析の問題であり、規模の程度は実証的手続きを経てはじめて決定しうるものである。」(Noedham, 1973, xxx)

(4) 集合表象と個人意識と分析表の三角関係

ここで取り上げてきた二元的諸対立は、個別社会の文化的範

嚙であり、集合表象 (i. e. 'conventional modes of speech and action' — *ibid.*, xxv) である。集合表象と、その社会に生きる諸個人の概念的把握との間にどのような関係があるかというのは、実に困難な問題だが、デュルケム以来、両者は混同すべきではないという方法論上の認識が(社会人類学においては)継承されてきている。その社会に生きる人々が集合表象をそれぞれ個人的に理解し、経験する様式と、研究者が資料に基づいて抽象化した図式とは、重複することはあっても一致するとは限らない(①に対する答)。(Needham, *ibid.*, xix-xx)

5

集合表象研究の一部としての象徴的二元対立に関する従来の方法と成果をこのように説明し、「不必要な」誤解を除去しようとする努力ながらも、ニーダムは次第にこの種の研究に内在する根源的な不確定性、相対性に目を向けていく。それというのも、歴史的、文化的に異なる諸社会から、相次いで類似した表象体系が報告されるにつれて、人間精神の普遍的傾向が「発見」されたと考える楽観的な見解が、俗流構造主義の普及と相まって、広がりつつあるからである。「このような見解の基盤となる分析的構築物を正当化し、かつそれらが思考と知覚の自然の様式と真に対応するかどうかを査定しようとする、即座に我々は立証性の限界を越えてしまうのである。」(xxxi)

それは、右と左という側性の象徴にのみ固有の問題ではなく、

あらゆる人間学の中心課題であり、哲学的であるが故に決定的な解決が得られないかもしれないニーダムは考える。これは、「事実」と「理論」という抽象化に付随する意味が多様すぎるし、また両者の間にあると想定されている関係自体も多様で確定しがたいということと関連をもつ。それでもなお、「いかにして、またどの程度まで、対立分析が正しいといえるのだろうか」という問いを、避けて通るわけにはいかない」(xxxi)として、考えられる確証法を検討するが、結果は悲観的である。

第一に、研究者が識別した分類体系の妥当性を確認するのに、実際にその中で生きている生活者の判断に頼れないだろうか。例外的に知識と経験の豊かな生活者が、それなりに一貫性のあるモデルを構築している稀な例の報告もあるし、一般に生活者のさまざまな説明と解釈が研究者の分析に必要不可欠な材料となっていて、これも確かである。しかし、集合表象は現存する生活者よりも古く、かつその外にあるものであり、逆に生活者は集合表象の表現者であっても創造者ではないし、もし創造の過程にあるとすれば、創造されつつある表象は未だ十分な集合性を帯びていないと考えられる。したがって、内部に育った生活者も、自律的社会事実としての集合表象に対しては、外部から来た研究者と大して違いのない立場にあり、決定的な権威者とはなりえないのである。社会人類学者が直面してきたもっと普通の状態では、事態はさらに説得力を欠いている。何故なら、右と左といった程度の相対的に単純な二元対立でさえ、生活者が意識していないことが多いからである。研究者の構築したモ

デルを生活者が肯定しても否定しても、確証にも反証にもなりえないことになる。(xxxii)

第二に、文献によって行なわれた分析を、調査者が確認したり、否定したりできるであろうか。こうした操作は実際にかなり行なわれていて、それなりに分析結果の確度の判定がなされたりするが、多くの場合それは資料の実証的な意味での洗練であって、集合表象のモデル自体は第一の場合と同様、肯定されても否定されても決め手にはならない。しかし、「確からしさ」が増せば、提示された分類は「何か」に対応すると考えざるを得ないともいえる。(xxxii—xxxiii)

第三に、比較法による間接的な証明は有効ではないだろうか。本書にある十七編の個別社会の象徴対立を比較してみると、明らかに類似がみられ、一般的な分類原理を設定できそうに見える。しかし、比較を行なうためには、比較の単位となる個々のシステムが確定されていなければならず、結局比較によることも迂回にすぎなくなる。(xxxiii—xxxiv)

確かに、いくつかの一定した価値や対比や観念連合を明示することはできる。右手の優越性はほぼ普遍的だし、生と死の対立や、右と男性、左と女性の連合も頻度の高いものである。しかし、分類性向一般の研究にとっては、システムとしての意味をもたないかもしれない。鉄の呪力性とか、妻の母を避けることとか、あるいは踊りといった文化現象は同様に高い頻度で世界中の文化の中にみられるが、それらが統合されたシステムであるとは考えにくいのである。同じことが象徴的分類について

の分析的構築についても言えなくはない。かくして、この種の研究に対する疑惑、疑念に対して決定的な反論をすることはできないということになる。象徴的二元分類の比較研究に見られるこのような困難さは、実証的手続きによって人間の思考と行動に関する理論に到達しようとするあらゆる試みに伴う困難さの範疇ともいべきものといえよう。(xxxiii—xxxiv)

6

集合表象と個人意識と研究者の分析概念という単純な三角関係に還元してみても、ニーダムが克服しようとしてきた不確定性が解決できるという論理的根拠はありうるだろうか。集合表象という概念で指示される「物」(デュルケムの用いた意味での)自体が、物としての識別性、反復性、安定性を備えているという保証がなさそうだからである。私もまた集合表象の研究こそ社会人類学における最も永続的な対象であると考えている一人だが、それは無限に「真」に近い近似値を求める操作というよりも、三者の動態的關係の中で相対的により不確からしくない、遠似値とでもいべきものについての流動的な合意を設定して行く作業のように思われる。

右と左の象徴的二元対立については、私自身、ウガンダのテソ社会で半信半疑ながら見出そうと努め、それがあまりにも容易にかつ疑いにくい形式で次々と眼前に現われたときには、自分もまた二元論という悪霊に取り憑かれたのではないかと頬をつねったりした。しかし、アフリカから帰って間もなく、日本

民族学会の研究例会で、テソ社会の儀礼分析を報告した際に、儀礼過程にみられる右と左の対立に言及したところ、私の提示した実証的資料を検討もせずに、二元論だというだけの理由でその信憑性を疑われるというひどい目に逢ったこともある。ニードムのエビゴーンであるという(さして不名誉とも思えない)レットルを貼られ、そのレットルが私の分析を疑う根拠として用いられたのは、驚いたばかりでなく、この種の研究自体がもつ敵意喚起力に目を見張ったものである。「学問的議論においては、否定的な反論にもそれなりの価値を認めなければならぬが、恨みがましい貶言からは、理解の進歩を期待することはできない。」(Needham, xxx) まあ、こういう箇所を引用するのも友人を増やす方法ではない。

比較民族誌的研究は、大規模で粗雑なものを除けば、まだ殆どその緒についたばかりといって過言ではない。しかし、例えば東アフリカにおける若干の試み(5)をみても、一つの社会に一つの集合表象を期待するという前提がもはやあまりにも愚直であることは明らかになりつつある。ニードムに対する私の不満は、あまりに早く純粹哲学的考察に足を踏み入れて、無限に多様な表象の動態の混沌に身を置きにくくなったように感じられることである。

(1) これは、亀井先生が言語学と社会人類学の間に共通の領域があることを認められたからではなく、半年間海外出張される間の空白を埋めることを私が厚かましくも買っ取ったという世俗的理由による。日常会話における先生の

「インプリケーションズ」から判断すると、「言語学(フィロソフィー) Ⅱ 学問」VS「社会人類学(フィールドロシー) Ⅱ 非学問」という相補的対立を個人表象として図式化されておられるようである。

(2) Hertz, Robert, 'La Prééminence de la main droite: étude sur la polarité religieuse', *Revue Philosophique*, 68, 1909. Newly translated by R. Needham as 'The Pre-eminence of the Right Hand: A Study in Religious Polarity', 1973.

(3) エヴマンズロムリチャード以前にホルツの影響によりて書かれた論文三編が本書に収められている。日本では古野清人が早くからホルツの論文を紹介し、また台湾高砂族の研究に適用している。古野清人「右手の優越」『古野清人著作集』4、三一書房一九七二(吉田植吉『魔性の文化誌』研究社一九七六、二二六頁)のことにエヴマンズは知らないようである。

(4) Evans-Pritchard, E. E., 'Nuer Spear Symbolism', *Anthropological Quarterly*, 26, 1953. (reprinted in *Nuer Religion*, 1956 and in *Right and Left*, 1973)

(5) Hertz, Robert, *Death and the Right Hand*, translated by Rodney and Chaudia Needham, Cohen and West, 1960.

(6) Needham, R., 'The Left Hand of the Mugwe: An Analytical Note on the Structure of Meru Symbolism'

Africa, Vol. 30, 1960. (reprinted in *Right and Left*, 1973)

(7) Bernardi, B., *The Magee: a Failing Prophet*, London, 1959.

ヘルナルディ自身はこの問題を意識していなかったが、ニーダムの分析を一応妥当なものと認めている。しかし、フィールドワーク至上主義者の多い社会人類学界において、他人の調査報告を再分析するというニーダムのとった方法は一種のスキャンダルとしていわれなき拒絶反応をひきおこしたかのように見受けられる。

(8) エヴァンズ・リブリチャード教授退官後二代おいて現在ニーダムが社会人類学の教授となっている。本書に寄稿している学者の殆どが何らかの形でオクスフォードと関係があり、そのため、ニーダムも指摘しているように、この種の研究がオクスフォード学派の共同幻想によるのではないかという皮肉もしばしば聞かれるのである。(長島信弘「英社会人類学印象記」『思想』一九六六年六月号)

(9) Needham, R., 'Right and Left in Nyoro Symbolic Classification', *Africa*, 37, 1967. (reprinted in *Right and Left*)

Beattie, John, 'Aspects of Nyoro Symbolism', *Africa*, 38, 1968.

ビーティはこの論文を本書に再録することを断わっている。ニーダムの論文が公刊されたとき、私もオクスフォード

ドにいたが、友人の話によると「研究所中、電流が流れたような衝撃だった」という。(cf. 亀井孝「ベダントリーのために」『一橋論叢』六十九巻五号「一九七三」) イギリスにおいても、学問に対する厳しさは人間関係の尊重ほどの美徳ではないようである。ゴシップついでに体験を記せば、ビーティ博士の講義に出席するからといってニーダム師の部屋を辞そうとしたら、「君、時間の浪費だよ」と言われたことがある。後で同感するに至った。

(10) ターナーもまた、ニーダムらは対立項を常に成立しているとみなしているが、脈絡によって意味や組み合わせが異なるものだと批判している。Turner, Victor, *Ritual Process*, Aldine Publishing House, 1969, 40. (ヴァンタム・W・ターナー「富倉光雄訳『儀礼の過程』思索社、一九七六) ニーダムの表現の仕方自体にこのような誤解を生む素地があるといえよう。

(11) ビーティは auspicious という語を批判の対象として用いているが、ニーダムの表にはこの語はない。

(12) 本書よりもさらにこの傾向が強いのが R. Beattie, *Belief, Language and Experience*, Basil Blackwell, 1972. がある。以下の確証性についての彼の議論は、この書の最終章に対応するところが多い。

(13) ニーダム自身、一時この種の楽天的な「発見」の喜びに浸っていたかの印象があり、彼もまたそれを自認している。(Needham, 1973, xxxi)

(14) テソ社会の右と左の対立には、中間項としての「中央」が大きな意味をもつ情況がある。また、このような諸対立を実証的に確定する基準について若干の考察を試みたことがある(一九七二b)。主な論考として次の三篇をあげておく。

長島信弘、一九七二a 「ウガンダ、北部テソ社会におけるエタレ・システム概観」『民族学研究』三六巻四号、一九七二b、「脱穀場を清掃する儀礼」『季刊人類学』3

巻4号。

一九七四 「住居の象徴性」『言語、別冊 アフリカの言語と文化』大修館。

(15) たゞきは Southall, Aiden, 'Twinship and Symbolic Structure' in *The Interpretation of Ritual*, edited by J. S. La Fontaine, Tavistock Publications, 1972.

(一橋大学助教授)